

令和4年3月20日 刊行

調査成果報告書

令和3年度

大阪大学大学院人間科学研究科

大阪大学人間科学部

比較発達心理学研究分野

日々の研究活動にご協力いただいているお子さまと保護者さま

調査成果報告のお知らせ

日増しに暖かさを感じる今日このごろ、みなさまお変わりなくお過ごしでしょうか。

本年度（2021年）から発足された赤ちゃん研究員制度によって、昨年の秋口から多くのお子さまが大学での調査に参加してくださいました。また、都島児童センター、郡山敬愛幼稚園、摂津ひかり幼稚園では学生の実習を受け入れていただき、各園でも多くのお子さまが調査に参加してくださいました。私たちの研究は、お子さまと保護者さまの研究への理解と参加によって成り立っています。コロナ禍にもかかわらず、研究に参加していただいたお子さまと保護者さまには心より感謝申し上げます。なお、今回は残念ながらご予定が合わなかった方や調査の対象年齢の都合で調査をお願いできなかった方は、登録していただいたにも関わらず大変申し訳ございませんでした。もし次回に参加する機会がありましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本研究報告書は、私たちの研究室が本年度に行った調査結果をまとめたものです（継続研究はここでは報告せず、調査が終わり次第報告いたします）。すでに学会で発表したり、論文にまとめたりして社会に発信しているものもあれば、問題提起の段階にある知見もあります。これらの発見や知識は、みなさまのご協力があつてのものであることを忘れずに、日々の研究にあたりたいと考えています。

お子さまと保護者さまが関わった研究成果はもちろん、その他の研究成果にも目を通していただくと幸いです。なお、学会や論文で未発表のデータを多く含んでおりますので、報告書の詳しい内容については、InstagramやTwitterといったSNS等で公開されることがありませんよう、よろしくお願いいたします。

大阪大学大学院人間科学研究科

鹿子木 康弘

目次

都島児童センターの皆様にご協力頂いた調査

ページ

- | | | |
|--------------------------|-------|---|
| 6歳児の異なるタイプのリーダーへの評価 | 天草聖大 | 1 |
| 5歳児の粘り強さについて | 石川萌子 | 2 |
| 6歳児はどんな人が悪い人を注意すると考えている？ | 壇上彩夏 | 3 |
| 5歳児のぬいぐるみに対する共感について | 二階堂寅翔 | 4 |

摂津ひかり幼稚園の皆様にご協力頂いた調査

- | | | |
|-----------------------------|------|-----|
| 6歳児におけるゆるしの機能の理解 | 戸田梨鈴 | 5-6 |
| 「違反の繰り返し」は5、6歳児の第三者罰を促進するか？ | 戸田七鈴 | 7 |

郡山敬愛幼稚園の皆様にご協力頂いた調査

- | | | |
|---------------------------|------|---|
| 物語の読み聞かせは幼児の思いやり行動を増やすのか？ | 田口俊哉 | 8 |
| 6歳児における公正世界信念の発達 | 田辺和奏 | 9 |

目次

赤ちゃん研究員の皆様にご協力頂いた調査

ページ

乳児における協和・不協和音による社会的関係性の推測	伊藤真央	10
他者との比較で子どもの粘り強さは増すのか	小川愛佑菜	11
赤ちゃんの視線と真似の関連	上條淳夏	12
心に関する言葉かけは子どもの顔を見る頻度と関連するのか	砂原なごみ	13
自閉スペクトラム症と不安	高橋七海	14
親の性格は子どもの言葉の学習に影響するか？	三川明日香	15
母親からなでタッチをされると乳児は画面を長く見るのか？	山田沙樹	16



6歳児の異なるタイプのリーダーへの評価

天草聖大 (大阪大学 人間科学部 学部4年)

■ 研究の背景

リーダーには2つのタイプがあると言われています。1つは、みんなから怖がられることによってリーダーになるタイプです。もう1つは、知識を教えることによってリーダーになるタイプです。本研究では子どもが2つのタイプのリーダーのどちらと友達になりたいか、どちらを自身のリーダーになってほしいか、どちらを優位と思うかを調べました。

■ 調査の手続き

2021年度の年長児39名のお様が参加しました。2つのタイプのリーダーが登場する自作の絵本を読み聞かせた後に、図1（国民に厳しくすることで怖がられている王様と優しく色々なことを教えている王様）を提示しながら、「どっちの人と友達になりたい？」と「どっちの人をリーダーとして選びたい？」を質問し、図2を提示しながら、「かっこいい椅子とかっこ悪い椅子があって、2人はかっこいい椅子を奪い合っています。上のかっこいい椅子にどっちが座ると思う？」と質問しました（優位性に関する質問）。



図1



図2

■ 結果

調査の結果、みんなから怖がられることによってリーダーになるタイプよりも、知識を教えることによってリーダーになるタイプと友達になりたいと思い、リーダーになってほしいと思い、優位だと判断しました。

■ 考察

6歳くらいの子どもの他者を助けようとする向社会的な人を好み、向社会的な行動が社会で受け入れられることを認識していることから、知識を教えることによってリーダーになるタイプと友達になりたいと思い、リーダーになってほしいと思い、優位だと判断したと考えられます。





5 歳児の粘り強さについて

石川萌子（大阪大学大学院 人間科学研究科 修士1年）

研究の背景

困難なことがあった時に諦めずに頑張れるか、という「粘り強さ」は子どもの将来のさまざまな成功を予測する重要な要素です。しかし、どういった個人の特徴が粘り強さと関連しているのかはまだ分かっていません。そこで、本研究では複数のゲームを子どもにしてもらうことで、粘り強さと関連する子どもの能力は何かについて調査を行いました。

調査の手続き

74 名のお子様(2020・2021 年度の年中のお子様)が参加しました。不適切な行動を抑えることができるか、どのくらい我慢することができるか、ルールを上手く変更することができるか、といったことを図1のパペットなどを用いたゲームを行って調べました。また、粘り強さは図2の木箱を開けるためにどのくらい頑張ることができるかを調査しました。

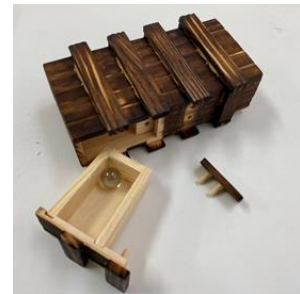


図1

図2

結果

調査の結果、粘り強く取り組むためには、自分の気持ちをコントロールして我慢する力と、ルールを切り替える力が必要であることがわかりました。また、木箱を開けようとする時に、複数の遊び方（木箱を振る、引っ張る、など）を行えることや、気が散るものをあまり見ないことが重要であることもわかりました。

考察

粘り強く取り組むためには主に2つの力が必要でした。今後は、大人がどのような関わり方をすると粘り強く取り組めるようになるのかについて、検討していく予定です。

6歳児はどんな人が悪い人を注意すると考えている？

檀上彩夏（大阪大学 人間科学研究科 学部4年）

研究の背景

子どもたちは悪いことをした人は怒られるべきだと思っています。また、先生やお母さんといった役割のある人が悪いことをしてしまった子に注意をすべきだと考えていることもわかっています。そこで、私たちは役割以外の要素として、注意をする人の年齢や性別の違いが、その人が注意すべきかどうかの判断に影響を与えるかについて紙芝居を用いて調査を行いました。

調査の手続き

年長さん(2021年度)38名のお子様に参加しました。図1のようなイラストを見せて、友達が嫌がることを言ってしまった幼稚園の子に対して、それを見ていた幼稚園児(男児/女児)・大学生(お兄さん/お姉さん)・お年寄り(おじいちゃん/おばあちゃん)が、どんなことをすると思うか質問しました。



図中左から

お年寄り(杖持ったおばあちゃん)

嫌がることを言われた園児(ピンクのTシャツの女の子)

嫌がることを言った園児(青いワンピースの女の子)

見ていた園児(青いTシャツの女の子)

大学生(ピンクのシャツのお姉さん)

図1

結果

調査の結果、注意する人はお年寄りよりもお兄さんやお姉さんの方がいいと判断しており、注意する人の性別の違いはその判断に影響しませんでした。またお年寄りと大学生は、悪いことをしてしまった子を直接叱り、園児の子は先生やお母さんなどに頼るといった間接的な方法をとると考えていました。

考察

子どもたちは、お年寄りよりも大学生のお姉さんやお兄さんが注意すべきだと思っていることがわかりました。今後は、同じ調査を成人を対象に行ったときにどのような結果になるかを調べ、子どもの結果と比較する予定です。

5歳児のぬいぐるみに対する共感について

二階堂寅翔（大阪大学 人間科学部 4年）

研究の背景

子どもの想像力が子どもの共感する力に与える影響は、まだまだ研究が進んでいません。本研究では、ぬいぐるみのような「物」に対して友達のように接している子どもは、ケガをしたぬいぐるみを見つけたとき、「痛そう」、「悲しい」といった共感の反応を示す傾向があるのかどうかについて調査を行いました。

調査の手続き

30名のお子様（2021年度の年中児さん）が参加しました。調査に先駆けて、お子様が普段から名前を付けてコミュニケーションを取っているぬいぐるみがいるかどうか、アンケートを行いました。調査では図1のケガをしたぬいぐるみを見て、どんな気持ちになったかを図2、図3の絵から選んでもらい、その後ぬいぐるみに対してどんな行動（慰める、なでるなど）をするのかを分析しました。



図1

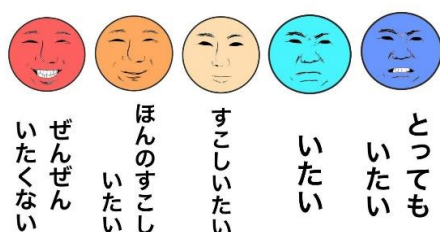


図2

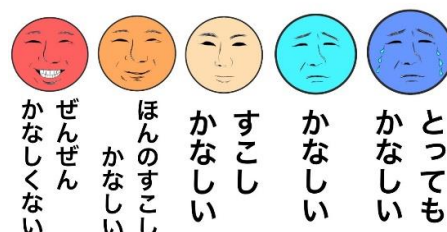


図3

結果

ぬいぐるみに対して友達のように接しているお子様が、ケガをしたぬいぐるみに示す共感と、ぬいぐるみであまり遊ばないお子様がケガをしたぬいぐるみに示す共感に差はありませんでした。しかし、ぬいぐるみに対して友達のように接しているお子様は、ケガをしたぬいぐるみに対して「大丈夫？」のような声かけを多く行う傾向がありました。

考察

ケガをしたぬいぐるみを慰めようとしてなでるのではなく、ぬいぐるみと遊ぼうとしてなでるお子様が多数いたため、正確に共感を測定することが出来ず、はっきりとした結果にならなかったことが本研究の課題として挙げられます。

～ 6 歳児における ゆるしの機能の理解 ～

大阪大学比較発達心理学研究室 学部 4 年 戸田 梨鈴

本調査の目的:

これまでに行われたさまざまな研究から、幼児は 5-6 歳ごろから他者を ゆるすことができると明らかにされています。そこで本調査では、その 5-6 歳児が「相手をゆるす」ことが持つ主要な機能を理解しているかを検討することを目的としました（実験 1）。さらに、その機能の理解度が 実際に相手をゆるす行動と関連しているかを検討することを目的としました。（実験 2）。

実験 1:

<手順>

お子様は 紙芝居で 2 つのストーリーを読み聞かせました。内容は「主人公に対してお友達が 悪いこと(積み木を壊す・絵を破る)をした後、あやまりに来た」という場面で主人公が「いいよ」とゆるす、または「いやだ」とゆるさない というものでした。

各ストーリーについて 次の 2 つの質問をしました。

- A) 結末について：ゆるした・ゆるさなかった場面の後で、主人公は お友達と一緒に遊ぶか、それとも別々に遊ぶか。
- B) 好意度質問：ゆるした・ゆるさなかった場面の前後で、主人公は お友達のことをどう思っているか。

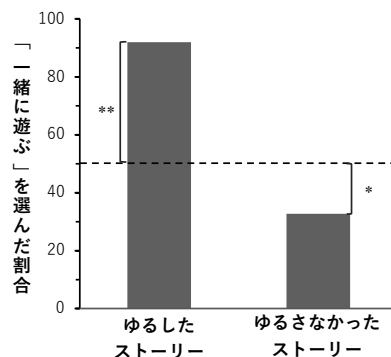


<結果>

【 A：結末について】

ゆるしたストーリーでは「一緒に遊ぶ」という結末を、ゆるさなかったストーリーでは「別々に遊ぶ」という結末を選ぶという結果が得られました。

つまり 5-6 歳のお子様は、**相手をゆるした時は その相手との関係性が修復され、逆に相手をゆるさない時は 関係性は修復されないと 理解していることが示されました。**

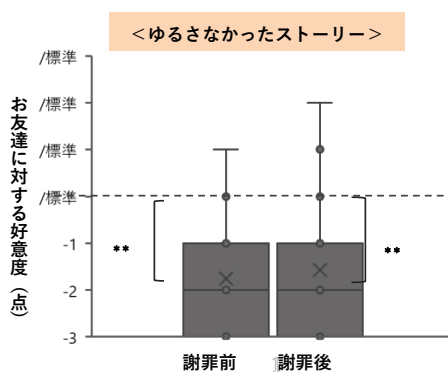
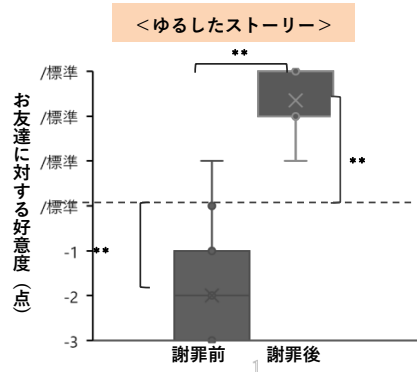


【 B：好意度質問】

ゆるしたストーリーでは、お友達が謝る前は 主人公は お友達に対してネガティブな感情（きらい）を持っているのに対し、謝った後には ポジティブな感情（すき）へと変化すると考えていることが示されました。

一方ゆるさなかったストーリーでは、お友達が謝る前も 謝った後も、主人公は お友達に対してネガティブな感情を抱いており、ポジティブな感情にはならないと考えているという結果が得られました。

つまり 5-6 歳のお子様は、**相手をゆるした時は 相手へのネガティブな気持ちが好意的なものになり、逆に相手をゆるさない時は ネガティブな気持ちのまま変化しないと 理解していることが示されました。**



実験 2 :

<手順>

お子様とレインボースクラッチシートでお絵かきをしようとしたところ、お子様が使うはずだったスクラッチシートが別の幼稚園の子どもによって使われてしまった、という場面を設定しました。この時、使われた 5 枚のスクラッチシートのうち 何枚を 絵を描いてしまった子どもに返却するかを お子様を選んでいただきました。
選択後、お子様には新しいスクラッチシートを使ってお絵かきをしていただきました。

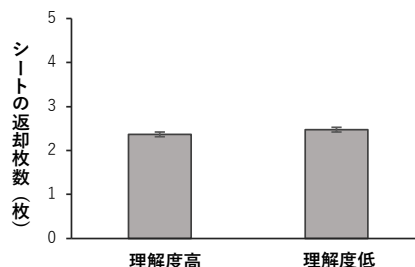


<結果>

お子様が回答した返却枚数と、実験 1 の回答（ゆるしの機能に関する理解度）に関連があるかを検討しました。

その結果、ゆるしの機能に関する理解度とシートの返却枚数には関連が見られませんでした。

つまり 5-6 歳のお子様の **ゆるしの機能に関する理解度と実際に他者をゆるす程度には関連が見られませんでした。**



関連が見られなかった理由として、脳の中で ゆるしに関する知識を司るシステムと、実際の行動をコントロールするシステムが異なっていることが考えられます。この理由が妥当なものであるか、さらなる調査で明らかにする必要があります。

まとめ:

本調査では、5-6 歳児のお子様は「ゆるす」ことについて、①相手との関係性を修復する ②相手への感情を好意的なものに変化させる という 2 つの主要な機能を理解していることが明らかになりました。一方、この 2 つの機能に関する理解度と 実際に他者をゆるす程度には関連が見られませんでした。

今後は さらなる調査を通して、幼児期の「ゆるし」について理解を深め、言葉での説明が難しい幼児期のお子様の「ゆるし」を測定する手法の開発にも発展させたいと考えております。

「違反の繰り返し」は 5,6 歳児の第三者罰を促進するか？

大阪大学比較発達心理学研究室

学部 4 年 戸田 七鈴

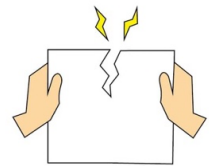
＜本調査の目的＞

これまでの研究により、幼児期の子どもたちは道徳について学ぶだけでなく、相手に道徳を教えることもできることが明らかになっています。特に、自分が直接影響を受けていない道徳違反を罰する行動（第三者罰）はヒト特有と考えられており、その発達について多くの研究が行われています。

このような第三者罰は、どのような場合に促進されるのでしょうか？本調査では、現代社会において広く受け入れられている「違反を繰り返す人を初めて違反した人よりも厳しく罰する」という考え方に着目しました。そこで 5,6 歳児が「違反の繰り返し」の情報に基づいて第三者罰行動を変化させるのかを調査しました。

＜調査の手続き＞

調査員がお子様とおもちゃで遊んだあと、お友達の絵を破ってしまう子どもの動画を見せました。この時違反の繰り返しについて 2 種類の説明を用意し、どちらか 1 つを説明しました。



初めて条件：この子は**初めて**お友達の絵を破ったよ

繰り返し条件：この子は**今までに 5 回**破ったことがあって、今日もまた破ったよ

動画視聴後、お子様に 動画に登場していた子どもにおもちゃで遊ばせてあげるかどうかを尋ね、おもちゃを以下の 2 種類の箱のどちらかに入れていただきました。

遊んでも**良い**：鍵なしの箱

遊んでは**いけない**：鍵付きの箱



また、お子様が鍵付きの箱を選んだ場合、「どのくらいの時間 鍵をかけるか」も尋ねました。

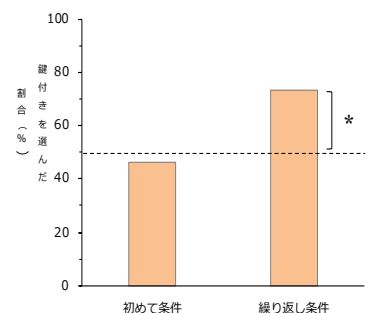
＜結果＞

初めて条件の説明を聞いた場合と、繰り返し条件の説明を聞いた場合で、鍵付きの箱を選ぶ子どもの割合に違いが見られるかを調べました。

分析の結果、繰り返し条件では初めて条件よりも鍵付きの箱を選択する割合が高くなることが明らかになりました。

さらに おもちゃの箱に鍵をかける時間の長さについても、繰り返し条件では初めて条件よりも鍵をかける時間が長くなることが明らかになりました。

つまり、5,6 歳児は、違反を繰り返す人に対しては、初めて違反を行った人に対してよりも **より積極的に、より厳しく罰する**ことが明らかになりました。



今後はさらなる調査を通して、罰行動がどのようなメカニズムに基づいて促進されるのかを調査し、幼児期の道徳発達に関する研究をさらに発展させていきたいと考えております。

物語の読み聞かせは幼児の思いやり行動を増やすのか？

田口俊哉(大阪大学人間科学研究科修士1年)

研究の目的

ヒトは幼い頃から、他者への**思いやり行動**を自発的に行います。お子様の思いやり行動には、他者へ**共感**する能力などのその子自身の個人特性の他に、道徳的な**物語の読み聞かせ**などの周りの大人からの働きかけが影響すると言われています。

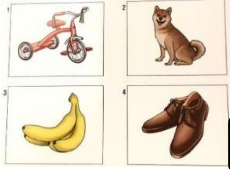
本研究では、物語の中でも、特に”手助けをしなかったことで登場人物に後悔感情が生じる”という内容が**お子様の思いやり行動(特に他者に自分の物を分配する行動)を増やすのでは**ないかと考え、共感性の影響と合わせて検討することを目的としました。

課題 ※6歳のお子様61名(2020年度、2021年度の年長児さん)に参加してもらいました。

言語能力課題

調査者が言う単語にあった絵を選択してもらいました。

※その他の課題にお子様の言語能力が影響しないことを確認するために行いました。



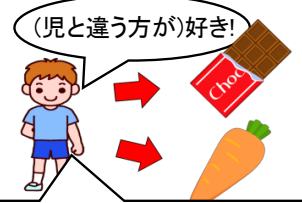
犬はどれ？

共感性課題

写真を見てどれくらい痛いと感じるか、自分と違う他者の気持ちを理解できるかを尋ねました。



どれくらい痛い？



この子はどっちが好き？

物語課題

主人公に後悔感情が生じる物語を聞いて、主人公がどれくらい悲しいと感じたかと思うかを尋ねました。



どれくらい悲しい？

分配課題

見知らぬ他者に自分が貰ったシールを分けてもよいかを尋ねました。



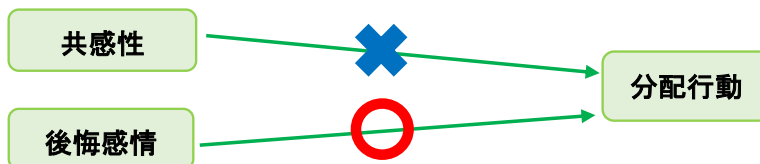
シールを何枚あげる？

結果

共感性は他者への分配行動とは関連しませんでした。

後悔感情を強調した物語を聞くことは、他者への分配行動と関連していました。

※言語能力が他の課題に影響することはありませんでした。



結論

共感性のようなお子様の個人特性は、今回調査した見知らぬ他者への分配といった思いやり行動とは関連せず、物語によって後悔感情をシミュレーションすることが思いやり行動につながると考えられます。

6 歳児における公正世界信念の発達

田辺和奏（大阪大学 人間科学部 4 年）

研究の背景

公正世界信念とは、世界は安全な場所で、理由もなく苦しむことは無いと信じる傾向です。6 歳ごろから、子どもは良い行動が良い結果に、悪い行動が悪い結果につながると考えるようになるといわれており、この時期に公正世界信念を持ち始める可能性があります。また、同時期に過去や未来の時間を理解できるようになってくるともいわれており、公正世界信念を理解するために時間を理解する力が必要になるのかもしれませんが。そのため、本調査では、公正世界信念の発達と時間理解の能力の関連を検討しました。

調査の方法

2021 年度に幼稚園の年長組にいた 5、6 歳のお子様 40 名に参加していただきました。

<時間理解課題>

過去の時間理解課題では、起床・昼食・入浴・睡眠の 4 枚のイラストをいつもとは逆の順番に並べ替えるという課題を行いました。



過去の時間理解課題の例

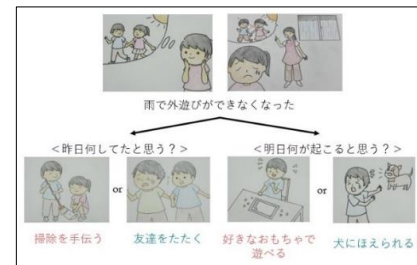
未来の時間理解課題では、写真の場所に行くにあたって必要なものを、3つのアイテムの中から1つ選ぶという課題を行いました。



未来の時間理解課題の例

<公正世界信念課題>

まず、幸運・不運が起こる紙芝居を読み聞かせました。その後、主人公をどれくらい好きかの質問を行いました。最後に、主人公が昨日何をしていたか・主人公に明日何が起こるかを2つの選択肢の中から選択してもらいました。



公正世界信念課題の例

結果・考察

まず、子どもたちは幸運な目に遭った主人公の方をより好んでいました。また、公正世界信念を持っていたら、幸運な話では昨日良いことをしていた、不運な話では昨日悪いことをしていた・明日良いことが起こると選択すると予想していましたが、結果として子どもたちはどの話であっても昨日良いことをしていたり、明日良いことが起こったりする方を選択していました。さらに、時間理解課題の成績によって選択に差はみられませんでした。本調査から、この年齢の子どもたちは他者をより良く評価しようとする傾向が強く、人は良いことをする、人には良いことが起こると判断しやすい可能性が示唆されました。

「乳児における協和・不協和音による社会的関係性の推測」

学部4年 伊藤真央

○研究の背景

赤ちゃんは、他者同士の振る舞いが調和しているかどうかに基づいて、他者同士の関係性を判断することができます。例えば、動きがバラバラな2人組よりも、ピッタリそろっている2人組を仲よしだと判断することが分かっています。一方、調和性から関係性を判断する傾向は、動きだけに見られるものでしょうか。本研究では、音楽に注目して、**協和音演奏**(ハモっている演奏)をするペアと、**不協和音演奏**(ハモっていない演奏)をするペアがいる場合、赤ちゃんは**協和音演奏**をするペアを比較的に仲よしだと思うかどうかを調べました。

○調査の手続き

調査に参加していただいたのは14～15ヵ月児のお子様16名でした。まずお子様には、3匹のぬいぐるみが2匹ずつペアになり、両手を動かして音楽を演奏する動画を見ていただきました。動画では、中央の茶色いクマが、左右のオオカミに話しかけ、それぞれと協和音演奏あるいは不協和音演奏を行いました。演奏曲は「メリーさんの羊」で、それぞれ協和音・不協和音に聞こえるように調整した音源を使用しました。その後、それぞれのペアが仲が良さそうに振る舞う動画を見せました。この仲が良さそうな様子に対して、お子様が何秒間画面に注目していたか(即ち、何秒で見飽きたか)計測しました。



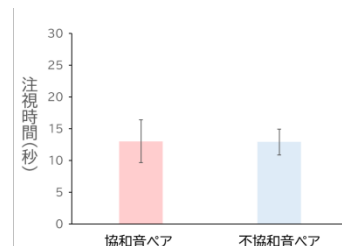
↑実際の動画の様子

○結果の予測

「お子様は**協和音ペア**を仲よし、**不協和音ペア**を仲が悪いと推測するだろう」という仮説を立てました。もしこの仮説が正しければ、協和音ペアの仲が良さそうな様子に対しては、お子様にとっては予想通りの結果なので、(期待に反しないため)画面を見る時間は短くなるだろうと考えました。一方で、不協和音ペアが仲が良さそうだと、(期待に反するため)画面を見る時間が長くなるだろうと予想しました。

○結果

お子様が画面を見ている時間を測り、分析したところ、協和音ペアと不協和音ペアを見ていた時間に有意な違いはありませんでした。そのため、「お子様が協和音を演奏するペアを仲よし、不協和音を演奏するペアを仲が悪いと推測する」ということは言えませんでした。



↑動画に対する注視時間

○考察

本研究の結果からは、音楽の協和性を手がかりにして赤ちゃんが他者の関係性を推測するかどうか、明らかにできませんでした。今後は、①今回お見せした動画の音源が、お子様にとって協和音・不協和音に聞こえていたかどうか、②お子様のこれまでの音楽経験と関連があるかどうか、という2つをさらに検討する必要があります。



他者との比較で子どもの粘り強さは増すのか

小川愛佑菜（大阪大学人間科学部 4年）

研究の背景

「やり抜く力（長期的な目標に対する粘り強さと情熱）」の高さは、教育・職業・日常生活など、様々な場面における成功と関係します。発達研究ではどんな要素がお子様の粘り強さを促進するのが調べられています。とくに4歳以上のお子様では、他者との比較を通して自尊感情が高まることで、課題への粘り強さが促進されると示唆されます。では、3歳以下のお子様ではどうでしょうか。本研究では、3つの課題を用意して、大人より自分の方がすごいと感じた時に、お子様の粘り強さが増すかどうかを検討しました。

調査の手続き

優越性操作課題：図1、図2のおもちゃを用いました。19名のお子様（17-35ヵ月児）に参加していただきました。それらのお子様を大人成功群10名、大人失敗群9名に分けました。お子様と大人が交互に3回ずつ取り組み、お子様は全てのターンで成功しました。大人成功群では両者が成功し、大人失敗群では「出来ないなあ」と言って大人が失敗する様子を見せました。



図1 ぽっとん落とし

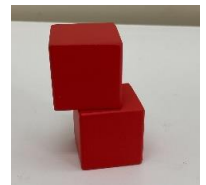


図2 積み木

粘り強さ課題：図3のおもちゃを用いました。最初にボタン①（音と光が出る）を提示してから、ボタン②（音も光も出ない）と交換しました。その後最大3分間で、ボタン②をお子様が何回押すかを計測しました。



図3 ボタン① ボタン②

結果の予測

もし大人より自分の方がすごいと感じた時に粘り強さが増すのであれば、大人成功群よりも大人失敗群のお子様の方が、粘り強さ課題でボタンを押す回数が増えると考えられました。

結果

粘り強さ課題においてお子様がボタンを押した回数を比較しました。大人成功群と大人失敗群の間では、ほぼ差はみられませんでした（図4）。

考察

大人が成功/失敗する様子を見せたとき、お子様の粘り強さに差は出ませんでした。今後は、お子様の表情などに注目して、大人より自分の方がすごいと感じることが3歳以下で出来るのかを検討する必要があります。

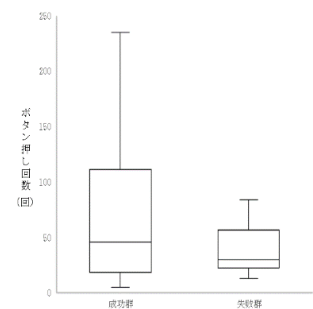


図4 粘り強さ課題で
ボタンを押した回数

赤ちゃんの視線と真似の関連

修士2年 上條 淳夏

調査の背景

赤ちゃんは「真似すること」を通して新しい経験を獲得します。一方、真似する程度は赤ちゃんによって様々です。本調査では、「こだわり特性」を切り口に2つ仮説を立て、なぜ真似することに個人差があるのかについて検討しました。

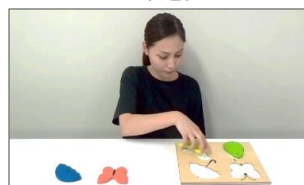
■仮説(A) 相手の行為を真似するには、行為の意図の理解が重要です。意図の理解には相手の顔の情報が重要ですが、こだわり特性が高いと顔を見る割合が低いことが知られています。本調査では、こだわり特性が高く顔を見る割合が低いほど、模倣成績が低いと予想しました。

■仮説(B) 相手の行為を真似するには、行為の流れの理解が重要です。その理解の指標として、行為を先読みの的に見ることが挙げられます。こだわり特性と関連のある脳領域「ミラーニューロンシステム」は、行為の先読み(知覚)と模倣(生成)を繋ぐ役割を担っているため、真似の個人差と関係があるかもしれません。本調査では、こだわり特性が低いと先読みの割合と模倣成績に関連があり、こだわり特性が高いと先読みと模倣に関連がないと予想しました。

方法 14~35ヶ月の41名に参加していただきました。

- ①アンケート: こだわり特性に関するアンケートを実施しました。
- ②行為観察: 「パズルで遊ぶ動画」「トンカチで遊ぶ動画」を観察する時のお子様の視線を記録しました。パズルの動画では、大人の顔を見る割合を調べました。トンカチの動画では、大人の行為を先読みの的に見る割合を調べました。
- ③行為模倣: ②の動画に映っていたおもちゃをお渡しし、お子様が模倣する様子を観察させていただきました。

大人の顔を見る？



先読みして見る？

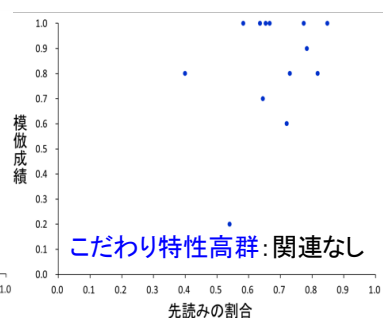
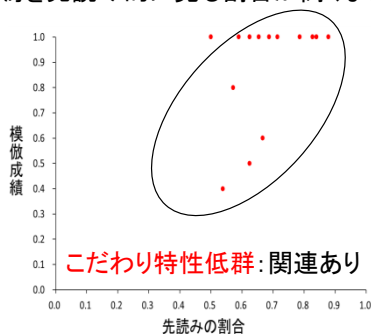


結果・考察

(A) こだわり特性・顔を見る割合・パズル模倣成績に関連はなく、仮説(A)は支持されませんでした。

(B) **こだわり特性の低い群**では、行為を先読みの的に見る割合が高くなるにつれてトンカチの模倣成績が高くなりました。**こだわり特性の高い群**では、先読みと模倣に関連がありませんでした。

このことから、行為の先読みと模倣を繋ぐ脳領域「ミラーニューロンシステム」が真似の個人差に関連している可能性が示されました。



心に関する言葉かけは子どもの顔を見る頻度と関連するのか

砂原なごみ(大阪大学 人間科学部 4年)

研究の背景

他者の心的状態を解釈できているかどうかを評価する指標として、Mind-mindedness というものがあります。これは、親が、子どもの感情や子どもの考えていることなどの心的状態を推測し、それを言葉として表すことで評価されます。しかし、心的状態を推測し、適切に解釈できているかどうかは、言葉かけではなく、親の行動から評価できるかもしれません。本研究では、「子どもの顔を見る」という行動が、子どもの心的状態を想像・解釈できているかどうかを評価する指標となるか調べました。

調査の手続き

11~13ヶ月のお子様とお母様45組が参加しました。お母様は、メガネ型の視線計測装置を着けた状態で、お子様と一緒に20分間おもちゃを使って自由に遊んでいただきました。その後調査者が、お母様の全発話のうち、子どもの心的状態を適切に理解できている、とみなした発話の数を割り出し、Mind-mindednessの得点としました。また、記録した視線データから視線の解析を行いました。

結果

Mind-mindednessが高いお母様ほど、お子様の顔をよく見ることがわかりました(図1)。しかし、子どもの心的状態を適切に理解できている、とみなした発話のタイミングと、お子様の顔を見たタイミングは関連しないようでした。

考察

お母様の Mind-mindedness と、お子様の顔を見る割合には関連があったことから、親が子ども(乳児)の顔を見るという行動は、子どもの心的状態を解釈できているかどうかを評価する指標として妥当であることが示されました。

今後は、Mind-mindednessが高い保護者様は、顔の中でも特にどこを見ているのかを調べるなどして、さらに検討していく予定です。

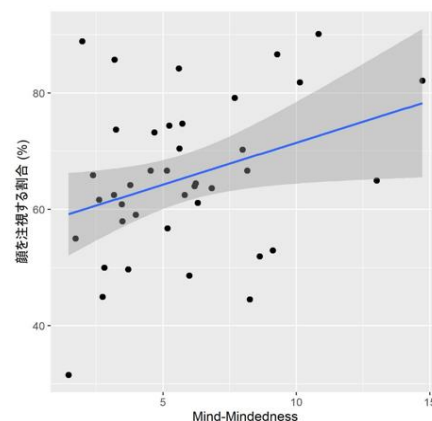


図 1



自閉スペクトラム症と不安

高橋七海(大阪大学 人間科学部 4年)

■ 研究の背景

不安が高い人は、ネガティブな言葉やヘビ・怒り顔の画像というような脅威関連の情報に対して特に敏感であることがわかっています。具体的な例を挙げると、ヘビの画像と花の画像が同時に提示された時、不安の高い人はヘビの画像へ選択的に注意を向ける傾向があるということです。自閉スペクトラム症のお子さんは定型発達のお子さんよりも不安が高いことが明らかになっており、脅威関連の情報へ選択的に注意を向ける傾向も強いことが考えられました。そこで本調査では、自閉スペクトラム症のお子さん¹と定型発達のお子さん²において、不安とこういった注意傾向の関連を比較・検討しました。

■ 調査の手続き

調査協力者:小学校3年生～中学校3年生までの自閉スペクトラム症のお子さん8名、定型発達のお子さん18名に協力して頂きました。

不安の測定:お子さんに不安に関するアンケートへ回答して頂き、不安の程度を測定しました。

注意傾向の測定:パソコンの画面に脅威・中性・ポジティブな画像をそれぞれペアにして提示し、お子さんがどちらの画像をよく見ているかを測定しました。

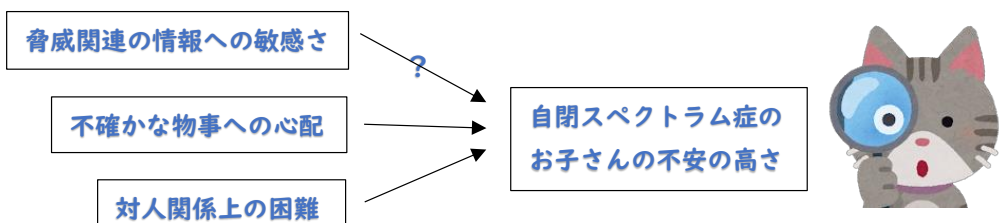


図1 不安が高い人の注意傾向

■ 結果と考察

定型発達のお子さんでは、極めて限定的であるものの、不安が高いと脅威関連の情報へ選択的に注意を向ける傾向がみられました。一方で、自閉スペクトラム症のお子さんでは、こういった注意傾向が全くみられませんでした。

このことから、自閉スペクトラム症のお子さんにおける不安の高さには、脅威関連の情報への敏感さがあまり関連していないことが考えられました。それよりもむしろ、他の調査で調べられているような不確かな物事への心配や社会的スキルの低さに伴う対人関係上の困難が不安の高さに関連しているのかもしれませんが、今後の調査によって、自閉スペクトラム症のお子さんの不安の高さには何が影響しているのか更に調べていく必要があります。



親の性格は子どもの言葉の学習に影響するか？

三川明日香 (大阪大学大学院 比較発達心理学研究室 修士2年)

研究背景と目的

子どもの言葉の学習には、言葉を教える親の影響が大きいことが考えられます。しかし、親の性格(特に、こだわりなどの性格特性)を含めて、子どもの言葉の学習について調べた研究はありません。本研究では、親子遊び中の、親が言葉を教える際の親の視線や子どもの言葉の学習に、親の性格が影響を与えるかを検討しました。

調査の手続き

17ヶ月～35ヶ月のお子様とその親御さん、計37組にご参加いただきました。

親の視線の測定 : 視線を記録できる装置を親御さんに装着し親子遊び中の視線を測定しました。(図1)

言葉の学習の測定 : モニター型の視線計測装置を用いてお子様の言葉の学習を測定しました。



図1. 親子遊び中の親の視線計測装置
見ている場所が赤い丸で表示される

結果

本研究では、親御さんの性格とお子様の顔やおもちゃへの視線に関連が見られました。親御さんのこだわりなどの性格特性が強くなると、親子遊び中にお子様の顔やおもちゃを見る割合が少なくなるという結果になりました。(図2)

一方で、親御さんの性格とお子様の言葉の学習には関連が見られず、お子様の言葉の学習には親御さんの性格特性は関係がないという結果になりました。

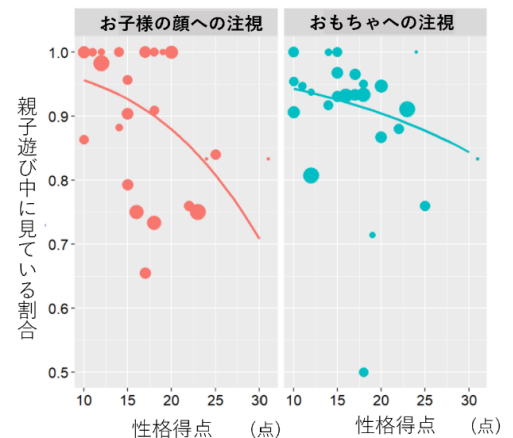


図2. 親の性格と視線との関連

考察

本研究では、親の性格は親子遊び中の親の視線に影響を与えるという結果が示されました。今後は、言葉の学習に影響を与える要因について子どもの性格特性なども含めて研究することが必要です。

母親からなでタッチをされると乳児は画面を長く見るのか？

修士2年 山田沙樹

研究の背景

乳児が特定の物を長く見続ける能力は、その後の発達に重要な役割を果たします。乳児が特定の物を長く見続けるためには、母親がおもちゃを振って見せたり、声かけしたりすることが効果的だと分かっています。しかし、母親が乳児にタッチすることの効果についてはほとんど分かっていません。

乳児はなでタッチをされると、リラックスした状態になることが分かっています。そしてリラックスした状態では、乳児は特定の物を長く見続けることも分かっています。そこで本研究では、母親からなでタッチをされることで、乳児が画面を長く見るようになるのかどうかを検討しました。

調査の手続き

12ヶ月齢のお子様（範囲：生後343—422日）とそのお母様42組にご参加いただきました。お母様には、膝の上でお子様を抱きかかえた状態で、お子様の右腕にタッチを行っていただきました。タッチは、①なでタッチ、②静止タッチ、③タッチなしの3種類でした。お母様には、いずれか1種類を行なっていただくよう調査者が伝えました。

タッチされている間、お子様には9分間の動画を見てもらいました。



結果の予測

静止タッチをされたお子様や、タッチされなかったお子様は、時間が経つにつれて集中できず、画面を見る時間が短くなると予測しました。一方で、なでタッチをされたお子様は、時間が経っても、画面を見る時間がずっと長いままだろうと予測しました。

結果・考察

タッチの種類に関係なく、どのお子様においても、時間が経っても画面を見る時間が長いままでした。なでタッチをされたお子様だけが、時間が経っても、画面を見る時間が長いままであるという予測は支持されませんでした。

予測が支持されなかった理由として、お母様がお子様を抱きかかえることでお子様が安心感を得て、画面への集中力が高くなった可能性が考えられます。今後は、お子様にベビーチェアに座っていただき、お母様がお子様の腕のみに触れることで、お子様が画面を長く見るようになるのかどうかを検討する必要があります。

